

一、主治医の言葉に沈む気持ち 大阪府 井上幸子 五六歳

持病があり、通院七年目になる。病院と薬は、ずっと欠かせない存在だ。診察の際、「いつもと違うことがあるれば、予約がなくてもいつでも来てね」と言ってくれる主治医を信頼していた。

先日、体調が悪く、予約外で病院へ行った。いつ呼ばれるか分からないので、ひたすら待合室で待った。三時間が過ぎ、ようやく診察室に入った。

主治医は吐き捨てるように言った。「今日は朝からバタバタして私も看護師もまだお昼も食べてないのよ」。一瞬驚いた。「私も待っていたのでまだですが」。ちよつと声をつまらせて答えた。

診察後、待たせて悪かったと謝罪の言葉はあったが、あの言葉は体の痛みや空腹よりこたえた。患者の気持ちは医師のひと言で上下するものだと思う。

二、私の二度の入院体験から

三、学者、命を捨ツると思うて、暫く推し静めて、云フべき事をも修すべき事をも、道理に順ずるか順ぜざるかと案じて、道理に順ぜばいひもし、行じもすべきなり。

『正法眼蔵随聞記 二・十二』

仏道を学ぶ者は、命を捨てる気になって、しばらく心を落ち着かせて、言うべきことでも、修行すべきことでも、道理にかなっているか、かなっていないかと思ひめぐらして、道理にかなっていれば言ひもし、修行もすべきである。

四、釈尊のお示しから

しかし、ラーフラよ、もしもそなたが、省察しながら、「私はこの身による行為を行っているが、この私の身による行為は、自分を害することにもなっておらず、他者を害することにもなっておらず、両者を害することにもなったおらず、この身による行為は善のもの、樂を生むもの、樂という結果のあるものとなっている」と、このように知るのであれば、ラーフラよ、そなたはこのような身による行為を、し続けるべきです。

ラーフラよ、そなたが身による行為をし終った時にも、「私はこの身による行為を行ったが、この身による行為は、自分を害することにもなっていないか、他者を害することにもなっていないか、両者を害することにもなっていないか、この身による行為は不善のもの、苦を生むもの、苦という結果のあるものとなっているか」と、そなたはまさにその身による行為を省察すべきです。 『パーリ中部』「アンバラッティカ・ラーフラ教誡経」

他にも自にも善であること、他にも自にも悪でないか、身による行為だけではなく、口による行為、意による行為についても同様に、省察が大切であることを、お釈迦様は息子であり仏弟子となったラーフラに説き示されている。よくよく自らに照らして歩みたいものである。